至誠

明治神宮武道場
至誠館　館長　荒谷　卓

なぜ欧州で武道が注目されるのか

今、欧州で日本の武道の精神性に対する関心が高まっている。

今年の八月に「国際至誠館武道アソシエーション」主催の国際武道セミナーが、フランスのラスコー洞窟の近くドルドーニュ県ペリグー市で開催された。欧州十ヶ国、約四十の道場から選抜された武道家たちが集まった。セミナーのテーマは、「オリジン」つまり起源や源泉、そして人類の祖先という意味だ。

セミナーを主催した欧州人たちは、「現代は市場中心のグローバリズムによって人類の正しい路線から著しく逸脱した時代」と定義しており、人間の本来の立ち位置に戻ることをテーマに据えたのだという。これはこの武道家たちが特別変わっているという訳ではなく、現代欧州人たちの不満や迷いを象徴したテーマ設定だと考えられる。

人間の欲望をエンジンとして無制限にマネーの獲得競争を許容するグローバル市場は、極端な貧富の差を生み、少数の富裕者の特権を守り、多くの人々の権利を奪う仕組みを極限まで膨張させてしまった。

この市場原理の中では、個と個の自由競争だけが重視され、社会や共同体という概念は忘れ去られ、消滅していく運命にある。

こうしたグローバリズムへの反動が、移民排斥運動や偏狭なナショナリズムの台頭という現象としてすでに多くの欧州諸国で現われている。

国際武道セミナーの参加者たちは、こうした中途半端なナショナリズムを超えて、さらに本質的な民族の原点、人類の原点を探求しており、その「オリジン」を探す手掛かりとして、日本の武道に注目している。

彼らは日本の武道の中に民族を超えて共通する本質的な普遍性を感じ、そこから民族の原点を探り出そうとしているのである。

武道とは道理を探求する生き方

日本の武道とは単に戦闘能力を高めるためのツールではない。武道には、社会集団の中で自分自身の犠牲を美徳とする道徳観念を内包している。つまり武道は、戦闘者が単なる戦闘能力を持つ武者に終わらず、「世のため人のために尽くし」、道理を探求して実践する道へと導く生き方を教えているのである。

しかも戦争という究極の状況に置かれながらも、精神の目的に応じて肉体を使い切る道をプロフェッショナルなレベルにまで高めたという点において、武道は、他の武術とは異なる独特の進化を遂げている。

例えば武道には「捨て身」や「入り身」という動きがある。これは自らを敢えて危険なゾーンに入れる態勢のことである。剣道においても剣下に身をさらすことは、初期の段階で学ぶ基礎である。これは「身を捨ててよし」とする精神が土台にあるためであり、「わが事よりも他者、世の中のため」という精神がなせる業であると言える。

日本の武道とは、柔道であれ合気道であれ、すべてそうした精神性に裏打ちされている。

同じような武道の精神性は、相手が「参った」と言った時点で戦いを終えることにも表れている。

これはスポーツとしてルールが確立する以前から存在した習慣である。すなわち殺し合いの実戦をしている時でさえ、「参った」と言って相手の心が非を認めたならば、無用の殺傷は控えるという精神である。

相手の心を糺せばそれで十分とする、「相手を活かす」精神が武術に備わっているわけである。

先の国際武道セミナーにはドルトーニュ県知事でフランスで青少年のスポーツ振興を担当する政府代表も研修に訪れた。彼は、日本の武道精神はフランスの社会と青少年に不可欠であると言明し、フランスの義務教育の中で青少年の健全な精神育成に役立てたいとの意向を示した。

かれらは、世のため人のために生きる道を、武道を通じて青少年に学ばせることで、行き過ぎたグローバリズムで破壊されてしまった社会や共同体の再生に役立てられると考えているのだ。

不可分な武道の精神性と神道の教え

こうした武道の精神性は、日本の神道文化と不可分の関係にある。

古事記・日本書紀の神話では、最初に現われる神「天之御中主神（アメノミナカヌシノカミ）」は、宇宙の中心に在り、すべての根源を表している。その中心に霊的かつ物的エネルギーが集約し放出されることで万物が生じ、発展するという考え方である。この天地・万物を生成、発展させる霊的な働きを、神道では産霊「（ムスビ）」と呼んでいる。

この産霊の活動の中から生まれた霊のことを「直霊（ナオイ）」と呼び、自分の中にある直霊に従って生きるのが神道の教えである。

したがって、個は全体の発展活動の一部を担う存在で、個々の努力はそのまま社会全体の発展に寄与すると考える。したがって、自分の身体は、このような全体の幸福を望む直霊の精神の顕現である。

この神道の発想は、武道の鍛錬と共通している。武道においては「腹を鍛える」と言って臍下丹田に意識を集中することによって、そこからエネルギーを出す鍛錬を重ねるが、これはそもそも直霊の力を出すという発想に基づいている。

だから他の武術やスポーツと違い、武道においては中心以外に力点を作らない、すなわち力まないことが重要とされる。体が力んでしまうと臍下丹田の直霊のエネルギーが滞ってしまうからだ。

こうした神道の教えに基づく武道においては、そもそも自他に優劣は存在しない。他者も自身と同じように直霊を持ち、各自が体内に神性を内包しているからである。

これは究極的な平和主義に繋がる思想でもある。武道が単なる戦闘技術とは異なり、相手を活かす精神性を備えているのは、こうした神道の教えに裏打ちされているからだ。

さらにこうした神道の教えは、日本の社会を支える原理でもあった。そもそも日本における社会、共同体とは、個人の持つ直霊と直霊の関係を基盤としていた。自身よりも強い霊を持つ人に対する尊敬の念から、自発的にその人の下に入り、そこで自身の直霊を社会のために使うという発想が根本に存在した。

日本の社会は、欧米で使われるコミュニティとは異なる精神的な側面が強い集合体である。そしてこの社会の強さは、東日本大震災における地方の団結力や精神性の高さに現われていた。セミナーに参加した欧州の人々は、この日本人の姿に激しい衝撃を受けていた。

かつて、キリスト教徒であった内村鑑三は、「（武士道は）日本における唯一の道徳・倫理であり、かつ、世界最高の人の道」と述べ、「日本武士は、その正義と真理のため生命を惜しまざる犠牲の精神に共鳴して神の道に従った。武士道があるかぎり日本は栄え、武士道がなくなるとき日本は滅びる」とまで断言した。

今、世界がこの奥深い普遍的原理の存在に気づき、日本に目を向け始めている。